

## 論文要旨

エドモンド・ガーニーの音楽論における形式と表現内容について

上杉 奈央子

本論文は、19世紀後期のイギリスの思想家、エドモンド・ガーニー GURNEY, Edmund (1847-1888)の音楽論における形式と表現内容についての思想の研究である。

ガーニーの音楽思想は、その形式主義的な局面から、同時代にウィーンで活躍したエドゥアルト・ハンスリック (1825-1904) の音楽思想と共に、20世紀以降の形式主義の先駆けと一般に見なされている。しかし、これまでガーニーの音楽論の詳細な研究はあまり行われてこなかった。本論文は、ガーニーの主著であり、彼がその音楽論を展開している著書、『音の力』 *The power of sound* (1880) における議論の考察を通して、ガーニーの音楽思想を明らかにする。

形式主義と言われるガーニーの思想の解明にあたっては、彼の形式観を検討する必要があるが、『音の力』において、ガーニーの形式観は、彼の表現観と不可分に結びついている。そのため、本論文では、『音の力』における諸々の議論を、形式論と表現内容論という2つのテーマに沿って読み解いていく。

音楽の形式と表現内容に関するガーニーの議論は、『音の力』の諸章にわたって散在している。したがって、ガーニーの形式論と表現内容論を論じる際は、彼の諸言説をこの2つのテーマに沿って組織的に整理した上で検討しなければならない。そこで、形式論においては、「素材」と、素材の組織化としての「形式」についてのガーニーの思考を検討し、表現内容論においては、それに関するガーニーの主要な論点、すなわち、「表現性」と「印象性」、および、音楽と感情という問題を中心に据えて、彼の思考を明らかにする。

したがって、本論は二部構成とし、まず第I部ではガーニーの形式論について考察する。第1章では、音楽の素材と構造要素に関わるガーニーの諸概念——楽音、音階組織、リズム、旋律、ポリフォニーと和声——を詳らかにする。これらの諸要素の中で、彼は特に「旋律」を音楽における最も重要な要素と位置づけ、そのことを度々強調している。

この第1章における諸概念の検討をふまえ、第2章では、ガーニーが言う「本質的な形式」 *essential form* について検討する。ガーニーによれば、音楽の形式性においては「部分」が「全体」に優越し、部分構造における諸要素の緊密な相互依存関係によって成立する「旋律形式」こそが、「本質的な形式」なのである。さらに、その「旋律形式」が、「運動性(動き)」と理想的に一体化した時、ガーニーが‘*Ideal Motion*’と呼ぶものが形成される。この‘*Ideal Motion*’こそが、彼の音楽論全体の核心を成す概念である。

第3章では、この‘*Ideal Motion*’について、音楽の「知覚」に関するガーニーの議論からさらに詳細に検討を加え、聴き手における旋律の価値判断、すなわち、「良い旋律」と「つまらない旋律」の判断が、‘*Ideal Motion*’に根差していることを明らかにする。

ガーニーによれば、音によって形づくられるこのような「形式」は、人の感情に訴える力を持ってい

る。これに関して、第5章以降の第II部では、音楽の表現性についてのガーニーの立場を明らかにする。音楽の表現性を論じるにあたって、ガーニーは、「印象性」と「表現性」を区別している。彼によれば、前者は音楽の表現性にとって基本的なものであり、これに対して、後者は付随的なもので、音楽外の概念や事象への参照と結びついている。

第6章では、この「印象性」について検討を加え、「印象性」における感情喚起が、音楽が人の心を与える効果や音楽美の根拠である強い感情的興奮をもたらすものである、というガーニーの考えを明らかにする。そして、こうした「印象性」の概念を、第I部で扱った‘Ideal Motion’についての諸議論と関連づけて総合的に考察する。

最後に、形式論と表現内容論を通して明らかになったガーニーの音楽論の特徴的な点を整理し、同時代の他の理論家たち——エルンスト・パウアー（1826-1905）、A.B.マルクス（1795-1866）、ハンスリック——の議論との比較を通して、ガーニーの形式主義的な立場の位置づけを行う。さらに、ガーニーの音楽思想と現代の音楽思考とのつながりを、ジェラルド・レヴィンソンの「連鎖説」concatenationismの内に見ることによって、ガーニーの音楽論の今日的な意義を示す。